

第26回 青森県内の高校生による 海外エネルギー事情研修会の報告 ～スウェーデン・フランス訪問～

「サステイナブル ～ハッケンしよう！ 夢の切符～」



スウェーデン フォルシュマルク技術高校の先生・生徒とともに
(左から3人目より、千葉 成人さん、野宮 白夢さん、佐藤 海麗さん、牛木 鈴さん、佐々木 陽菜さん、小笠原 愛奈さん)

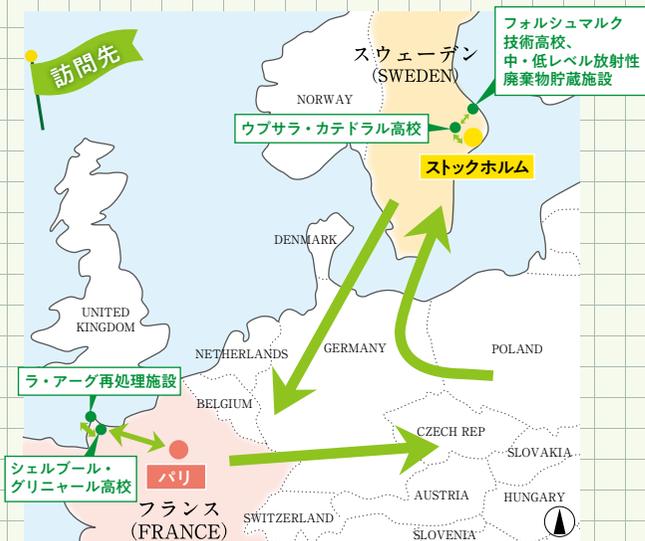
参加者 / 青森県内の高校2年生6名(訪問当時)
 訪問国 / スウェーデン・フランス
 実施時期 / 2020年1月27日(月)～2月7日(金)
 [11泊12日]
 団 長 / 青森商工会議所 中小企業振興部
 経営相談課主幹 大里 大輔氏
 (※)4月1日より課長代理
 引率教諭 / 青森山田中学高等学校 副校長 木村 郁子氏
 事務局(同行) / 東北エネルギー懇談会(文責)
 主催 / 青森県商工会議所連合会
 後援 / 青森県教育委員会、(株)東奥日報社、(株)デーリー東北新聞社
 (株)陸奥新報社、青森放送(株)、(株)青森テレビ、青森朝日放送(株)

26回目を迎えた研修会

青森県商工会議所連合会主催による本研修会は、今回で26回目を迎えました。この間、日本側の高校生の参加実績は180名に上り、今回も5倍を超える志願者の中から6名が選ばれました。昨年11月と本年1月の2度にわたる国内研修を経て、約2週間の海外研修(「現地高校訪問・交流」と「エネルギー施設訪問」)を実施したものです。

主要訪問先と行程

これまで訪問国は「フランス↓スウェーデン」の順序でしたが、今回は反対に致しました。その理由は、10時間以上に及ぶ長距離フライト直後の目的地移動にも、フランスではバスで5時間以上も要することから、移動時間の短いスウェーデンの方が、体の負担や移動遅延も少ないと考えたからです。結果的には、昨年の大雪・大寒波とは違い、今年は【写真1(23ページ)】のように雪も全く見られず、順調な行程となりました。



概要	スウェーデン王国	フランス共和国
面積	45万km ² (日本の1.2倍)	54万km ² (日本の1.4倍)
人口	1,000万人	6,700万人
GDP	5,700億ドル	2兆7,100億ドル
首都	ストックホルム(95万人)	パリ(225万人)
公用語	スウェーデン語	フランス語
通貨	クローナ(10円)	ユーロ(120円)

人口以下の数値は概数。「2018 データブック オブ・ザ・ワールド」(二宮書店)等を基に作成

行程

日程	行程	訪問先	滞在地
1/27(月)	青森▶東京▶羽田	・「スウェーデン・フランス大使館」表敬訪問	羽田
28(火)	羽田▶ストックホルム	移動	ストックホルム
29(水)	ストックホルム▶ウプサラ	・ストックホルム市内見学	ウプサラ
30(木)		・「フォルシュマルク技術高」交流 ・「フォルシュマルク中・低レベル施設」視察	
31(金)		・「カテドラル高」交流	
2/1(土)	ウプサラ▶パリ	移動	パリ
2(日)	パリ▶シェルブール	・モンサンミッシェル見学	シェルブール
3(月)		・「ラ・アーグ」視察	
4(火)		・「グリニャール高」交流	
5(水)	シェルブール▶パリ	・ベルサイユ見学	パリ
6(木)	パリ▶	・パリ市内見学	機中泊
7(金)	羽田▶東京▶青森	移動・解散	—

【写真1】

去年は厳冬、今年は暖冬



昨年2月のスウェーデン・フォルシュマルクの雪景色



今年のフォルシュマルクの風景
(積雪なし、小雨混じり)

I 「大使館表敬訪問」編

まず、海外研修のスタートは、東京の「スウェーデン・フランス大使館」の表敬訪問からです。

1. 「スウェーデン大使館」へ議論に臆せぬようにへ

スウェーデン大使館では、「スウェーデン核燃料・廃棄物管理会社(SKB)」「日本の窓口である竜啓介氏からご説明を頂きました。SKB社とは、原子力発電所や医療施設・研究所から発生する放射性廃棄物を処分管理する事業主体で、1984年に設立され、今回の訪問先の

が読めるからで、電気がないと初めてその有難みが分かる」という卓話で、高校生ばかりでなく我々大人にも心に沁みる一言でした。

II 「現地高校訪問・交流」編

さて、研修の目的の一つである「現地高校との交流」は、昨年と同様に3校で実施致しました。

1. 「フォルシュマルク技術高校」(スウェーデン)へ英語での実践力を高める契機へ

最初の交流先は、スウェーデンの「フォルシュマルク技術高校」です。同校は、電力会社と地元自治体の支援を受けている市立高校で、交流は昨年から始まりました。定員120名で、全国からエネルギーや科学に興味のある優秀な生徒が集まる全寮制の高校で、卒業後は電力会社への就職や大学に進学します。しかし、最近では、自治体の支援も厳しくなり、募集人員も激減し、2年生はゼロ、1、3年生合計で39名という状況です。とは言え、生徒の皆さんは生き活きとしており、学業

「フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物処分施設(SFR)」を運営管理しています。竜氏には長年本研修の受入窓口として、多くの知識と助言を頂いており、今回のお話の一つをご紹介します。「スウェーデンは、科学技術面でもノーベル賞のアルフレッド・ノーベルを始め、多くの優秀な技術者を生みだしている。その背景には、資源が乏しい国力の最大化を図るための研究・議論が盛んで、そこに国民性と有為な人材を輩出する素地がある」とのご指摘です。「皆さんも現地の高校生に気後れせず、どんどんしゃべって頂きたい」との熱いエールを頂き、高校生の背中を強く押してくれました。

2. 「フランス大使館」へ電気は知識も与えてくれるへ

次に訪問したのは「フランス大使館」。冒頭、お話頂いたのはルセック公使・次席で、日本とフランスはいずれも化石燃料資源に乏しく、産業発展には経済的に安定した原子力の利用が欠かせないと力説されました。また、電気の重要性について、アフガニスタン駐在経験のお話を披露され、「同国は、1979年の旧ソ連軍の侵攻により40年もの内乱・紛争で電気の恩恵に預かっていない。平均寿命も60歳で、今や国民の3分の2は電気を知らない。電気があると何が変わるのか。それは「電気は光ばかりだけでなく知識も与えてくれる」。何故なら夜も本

生活をエンジョイしているようでした。まず、交流は現地高校生と一緒に物理の講義を受けることから始まりました。内容は「核分裂」【写真2】。電力の支援があるものの、日本の工業高校でも学ぶことのないカリキュラムを神妙に受講しましたが、まだ固さも抜けないようでした。

その後の交流会では、自己紹介や学校生活・文化・趣味を通して和やかな表情になってきました。英語を通しての交流ですが、語学力は断然スウェーデン。実は、スウェーデンは、小学校から第二外国語に英語が導入され、中学校ではさらにロシア語なども勉強する環境で、小さい頃から多言語教育に力を入れています。でも、青森の高校生の皆さんも、自分の意思や思いを伝えようと、懸命にコミュニケーションに努めて実践力を高めていきました。

【写真2】

フォルシュマルク技術高校での授業風景



物理の授業で本日は「核分裂」
現地高校生と一緒に受講

2. 「カテドラル高校」(スウェーデン)
 ↳議論を高めて活発な討議↳

2校目は、「カテドラル高校」。「カテドラル」とは「大聖堂」の意味で、同校の歴史は何と1246年の神学校まで遡ります。国内屈指の名門校で、人文から科学、国際コースなどに分かれ、16歳から19歳までの1300名が学んでいます。同校とは本研修スタート時点(1993年)からのお付き合いで、スウェーデン側も日本を知る実践的な場として、この交流を大変重視しています。

【写真3】

カテドラル高校での討論風景



スウェーデンと日本のエネルギー問題を真摯に議論

さて、当日は日本語を学ぶ10名の生徒が入れ替わり参加し、両国の文化紹介やエネルギーの現状と将来について、個別に濃密な議論が交わされました【写真3】。エネルギーについてみると、「原子力」では、スウェーデンチームから「原子力に安全というものはない」と断言する女子生徒に対して、日本チームは「福島の水素爆発と原子力の安全

3. 「グリニャール高校」(フランス)
 ↳時間を超えて白熱したやりとり↳

なお、最終的に原子力のスタンスは、スウェーデン側7名の内、「今後も推進すべき」が3名、「現状維持」が2名、「廃止すべき」が2名で、「原子力容認派」が多数を占めました。

3校目はフランスの「グリニャール高校」です。ノーベル賞受賞の化学者名に由来する同校も、フランスでは歴史と伝統を有する名門・進学校で、生徒数は750名、自由闊達な雰囲気の中で個性と学力を日々磨き上げる校風です。日本語を学ぶ生徒は3学年合計で120名に上り、当日は1年生を除く60名が【写真5】のように、盛大に迎えてく

【写真5】

グリニャール高校での盛大な歓迎風景



熱烈歓迎で、交流ムードも最初から全開

れ、青森の高校生も

性の問題を一緒にしてはいけない」「安全は強化できるもの」など、事前の国内研修での知識を披露しながら、原子力の有用性を論じました。自分の言葉ではっきり発言する姿に、頼もしく思えた瞬間でした。

【写真4】

カテドラル高校での文化交流



和やかな文化交流後の全体スナップ

「また、「電気利用」に話題が移ると、スウェーデンからは、「日本は夜もネオンが多く、必要以上に電気を使い過ぎ!」との意見が出されました。日本チームも触発されて、「省エネはすぐには難しいけど、身近なところからやっつこう」「小さい頃からの意識付けが必要」、さらには「思うだけでなく、私たちも同世代のグレタ・トゥーンベリさんのように、日本の学校でも意見を出していかないといけない」等、次々に発言が出て、双方の納得感が高まっていく活発な討論風景となりました。最後は、多くの学生との文化交流で「幕」となりました【写真4】。

【写真6】

グリニャール高校での討論風景



「日本のエネ・ミックスと原子力の位置付けは?」(フランス側) 「各電源のデメリットを最小にするのがエネルギー・ミックス、原子力も同様」など、真摯なエネルギー議論で白熱

思わず緊張感が解かれ、10代の若者同士の親密の輪が一挙に高まった瞬間でした。しかし、昼食を終えてエネルギー問題を議論する場になると、和やかなムードは一転し、真摯に両国のエネルギーの将来を語り合う素晴らしいものとなりました【写真6】。フランスの皆さんは実に積極的に発言し、自国のエネルギー事情も十分に理解した上で、日本に鋭い質問を投げ掛けました。例えば、「エネルギー・ミックス」については、「化石燃料のCO₂排出・原子力の廃棄物処分デメリットをどうするのか」という具合です。これに対して、日本チームは質問の意味をしっかりと受け止め、「自分が考えるには、各電源のデメリットを最小にする

のが資源の乏しい日本のエネルギー・ミックス」と、見事に伝えてくれました。他に、「洋上風力」では、「日本側はこれからの課題」とみる中で、フランスでは「住環境への影響が少なく遮蔽物もない。風況も安定するので賛成」の意見や「両親が漁師で漁に影響が出るから反対」「海の環境汚染につながる」など、様々な意見が飛び交いました。一定の結論を導くのではなく、多方面の考え方をぶつけあつて、議論を深める手法に日本チームも刺激になったようです。その後は、一つの質問・意見に複数の考え方が双方から飛び出し、時間の過ぎるのを忘れるほどの盛り上がりでした。

なお、原子力に関して総括すると、60名中「親族がエネルギー・原子力に従事している」と答えた生徒は15名でした。しかし、在校生100名を任意に抽出したアンケートでは、この比率は何と7割に上ります。さらに、アンケートでは、原子力に「賛成」「反対」が、年代別でみると14～16歳で「46：54」、17歳以上が「60：40」という具合に、年齢が高いと賛成が上回る内容でした（14歳の生徒が在籍するのは、飛び級があるからです）。中学校から「原子力」の授業があるフランスでは、高校の物理の授業等で専門性を高めると、賛成の割合も高くなる現われでしょうか。

いずれにしても、日本チームはフランスのエネルギー教育が早期に取り入れられている点に大変驚き、日本の教育制度との違いを強く感じたようです。

さて、同施設ですが、これは近隣のフォルシュマルク原子力発電所の沖合3km、海底下50mに位置します。容量は6万3000m³で、容積では「東京ドーム」の20分の1に相当し、1988年の操業開始以来、半分以上が利用されています。将来は、海底下120m地点にも施設を拡張し（3年後を目処）、最終的には全体で17万1000m³まで拡大する計画です【写真8】。

サイトは、高校生の言葉を借りると「洞窟のようなところをバスで入り、海底で降りた所がSFR」といった感じで、ご説明・案内して頂いたのは2名のSKB社の女性広報の方々でした。

高校生の皆さんの感想・質問が集中したのは、女子からは「SKB社で働く男女比率」や「放射線の影響」でした。これについては、「社員は全体で500名おり比率は1：1、研究職に女性が多い」「20年間働いているが、放射線の影響はなく気にもしていない」などの発言が相次ぎました。そして最後に、「これまで電気の恩恵を受けてきた我々が、その廃棄物を次の世代に残す訳にはいかない、何故なら次の世代は原子力を使わないかもしれないから」という強い信念と仕事への高い誇りを語ってくれました。

また、男子は説明場所に置かれていた「高レベル放射性廃棄物」のモデルに興味を示し、こちらは、将来10万年に亘り地下500mの箇所に保管されるモデルであるとの説明に聴き入りました。この処分場も、フォル

III 「エネルギー施設訪問」編

1.「フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物処分施設(SFR)」
 ↳強い信念と仕事への誇り

スウェーデンで訪問したのは、「フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物処分施設(SFR)」です。訪問直前に、現地ガイドの博多寿子氏から、【写真7】のように日刊紙に掲載された原子力の説明を受けていたので、高校生の皆さんの事前知識はかなり高まりました。

【写真7】 スウェーデンの最大日刊紙の原子力特集記事

見出しは「今、何故、原子力がスウェーデンで大きな議題となっているか」
 (2020年1月22日付「DAGENS NYHETER」より)



【要旨】
 ・2040年には再エネを目指す、既存の原子力は期限まで存続する
 ・2018年は原子力40%、風力11%だが、2040年には原子力18%、風力40%、太陽光5%へ
 ・電力は北欧の協力で十分にあるが、冬の気温次第では(水力低稼働)、原子力の補完が必要になるかもしれない

シュマルク地区で計画され、地元住民の理解を頂くために、SKB社の担当者が直接出向き、ご理解に努めているそうです。

どの説明にも、高校生の皆さんは一樣に共感しておりました。いずれにしてもスウェーデンでは、原子力で享受した便益の残渣(放射性廃棄物)は将来世代に残すのではなく、享受世代が責任をもって処理するという姿勢に、高校生の皆さんは日本との違いを感じながら強く印象に残った見学となりました。

【写真8】



スウェーデン フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物処分施設の海底図
 (右[灰色]が既設、左[青色]が計画分、SKB社提供)

【写真10】

ラ・アーク施設でのランチミーティング



中央奥のオラノ社ベロー国際部日本担当課長を囲んで
(右手前が団長の大里主幹、左手前が引率の木村副校長)

数挙げられ、見学後の緊張感を巧みに緩めて頂きました。しかし、めったに見られない海外の施設を自分の足で回った経験は、一人ひとりの心の奥底に深く刻まれたことでしょう。

【写真9】

ラ・アーク再処理施設



・ラ・アークの再処理施設は「UP3」と呼ばれ、日本の再処理分の受託実績あり（現在は終了）
・現在の処理量は1,200 t /年で稼働率7割程度
・ラ・アークの地域貢献度は経済の7割に及び、雇用にも大きく貢献（青森県と日本原燃の関係にも近似?...農業・漁業・エネルギー等）
(写真はオラノ社提供)

フランスは、日本と同様に再処理政策を進めておりますが、その中核の施設が「ラ・アーク再処理施設」です【写真9】。ラテン語でウラニウムを語源とする「オラノ（ORANO）」社が管理し、同社は、原子力の「ウラン採掘から濃縮、燃料製造、再処理、廃炉、廃棄物処理」まで、ほぼ一貫した事業を展開し、国際展開も積極的です。

2. 「ラ・アーク再処理施設」
〜日本とフランスの方式の違いに驚き〜

訪問当日は、気温8度でやや肌寒く、小雨の混じる朝方でした。施設の重々しさもあり、皆さん口数も心なしか少なかつたようです。しかし、ご案内頂いた英国出身の女性広報の方の丁寧なお話しぶりゆつくりとした口調のお蔭で、徐々に雰囲気も和らぎ、密度の濃い見学となりました。

見学ルートは、(1)「使用済み燃料キャスク」受入・燃料取出し」↓(2)「燃料冷却プール」↓(3)「燃料溶解・剪断・ガラス固化処理」↓(4)「高レベル放射性廃棄物(キャニスター注入後)保管」↓(5)「コントロールセンター」の順番で、優に3時間を超えるものでした。

詳細は省きますが、高校生の皆さんが一樣に驚いたのはルート(1)です。昨年11月に国内研修の一環で見学した日本原燃(株)の施設では、水中で受入・冷却保管(湿式方式)するのに対し、同社は密閉した室内で取出し後(乾式方式)に冷却プールへ移送する点です。この乾式方式を取るのには、年間200体を超える搬入効率性を図ること、これまで事故も起こっていないからだと思います。これについて、高校生の一人は、日本も技術力では負けないとの感想を持ちました。

見学後、昼食をさみながら【写真10】のベロー日本担当広報課長との意見交換となりました。課長は日本に造詣が深く、何と柔道6段の有段者です。青森の六ヶ所施設も訪問したことがあり、青森と当地ノルマンジー地区との共通点(リンゴや自然、海産物など)を多

IV むすびに

1. 「陰の功労者の方々」 〜現地ガイドと添乗員の方々の奮闘〜

本研修の主役は、もちろん高校生の皆さんですが、これを陰でしっかり支えて頂いたのは、両国大使館や現地高校・エネルギー関係施設の方々です。なかでも特筆したいのは、長年、現地での案内・通訳を務めるスウェーデンの博多寿子氏、フランスの小林秋恵氏、そして日本からの添乗員のJTB押切勇一氏です。

ガイドの両方には、職務を超えて、若い世代に寄せる期待と熱意を高校生一人ひとりに対し、見事に投影して頂きました。また、押切氏には、フランスの公共ストの影響と新型コロナウイルス禍が及び寄る中での機動的な行程調整を十二分に果たして頂きました。

2. 「成長の軌跡」 〜研修での成長に目を見張る〜

高校生の皆さんは、いずれも個性的で、語学や音楽、スポーツなどの能力にも秀でた6名ですが、スタート当初は、エネルギーの知識にもばらつきがあり、些か

【参考資料】

青森県内高校生による海外エネルギー事情研修における放射線量の測定結果について
(2020年1月27日～2月7日)

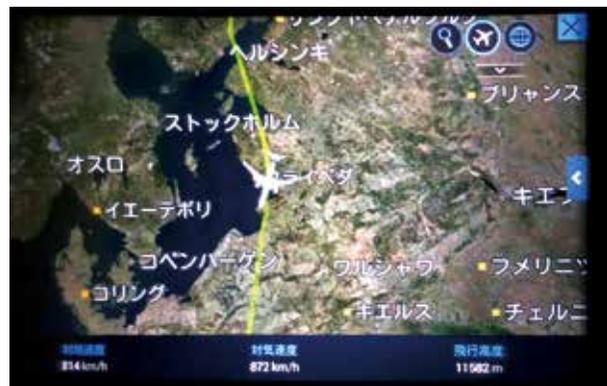
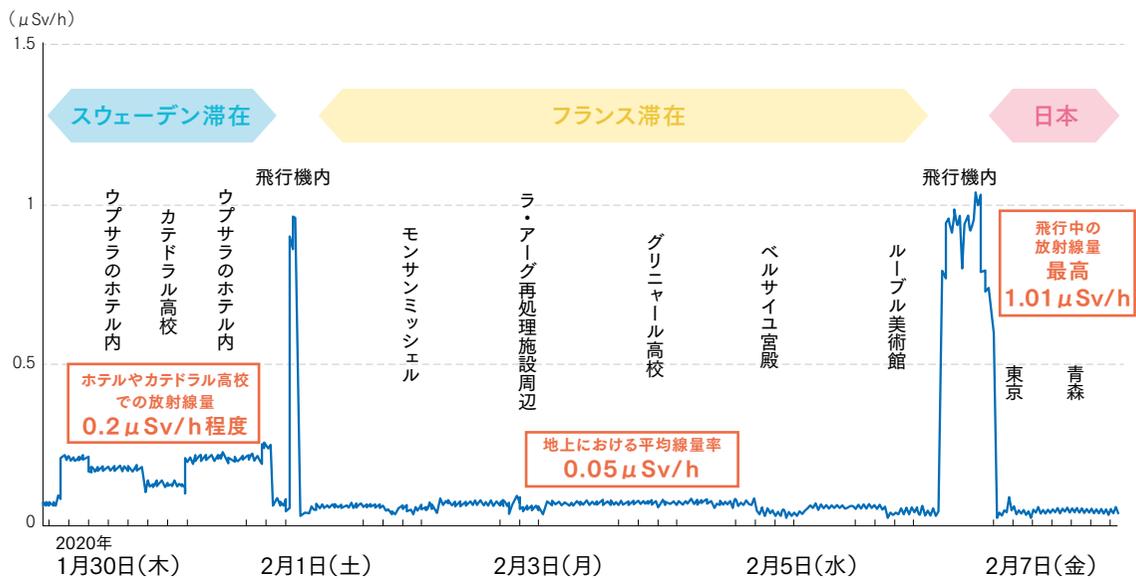
今回の研修で持参した放射線測定器による各訪問地の測定結果は次のとおりです。

- スウェーデン**

ホテル内やカテドラル高校の放射線量は、およそ0.2 $\mu\text{Sv/h}$ 程度でした。
日本は0.05 $\mu\text{Sv/h}$ 程度ですが、スウェーデンが高いのは建物にコンクリート造りが多く、建物自体からラドンが放出されるため、室内の換気状態によっては放射線量が高くなっていると言えます。因みに、スウェーデンの大地は、5億年前の岩体(先カンブリア紀)の影響で、放射線量は高い傾向にあります。
- フランス**

いずれの訪問先をみても、線量率は0.05 $\mu\text{Sv/h}$ 程度で、日本とほぼ変わりません(ラ・アーグ施設内は測定していませんが、施設周辺も0.05 $\mu\text{Sv/h}$ 程度です)。
- 飛行機内(飛行中)**

飛行機が飛ぶ高度10,000m付近では、1 $\mu\text{Sv/h}$ 程度と、データと写真のように極めて高くなります。
その理由は、宇宙線による放射線量が高くなるもので、宇宙線の主な成分である高エネルギーの粒子が大気原子と衝突して生じる二次宇宙線によって多くなるからです。



飛行機座席前モニターの航路表記(ミュンヘン到着前)



放射線測定器の表示画面

飛行経路：羽田～ミュンヘン～ストックホルム
測定：リトアニア上空
地上 約11,500m機内
(0.96 $\mu\text{Sv/h}$)

心許ない雰囲気でした。しかし、国内研修で知識を深めて徐々にメンバー相互の融和も生まれ、お互いに足りない知識を補完し合って連帯感を強めながら、海外研修を迎えたのです。海外では、同世代との交流や意見交換、さらにはプレゼンテーションを通して自信と積極性を高め、エネルギーについては、日本のエネルギー・ミックスの意義を十分に理解・発信するまでに至ったのです。加えて、何事にも臆せず様々な場面で発言や態度にも自信がみなぎるようになり、帰国直前には見違える姿となりました。

そして2月28日(金)の青森県知事への報告では、一人ひとりが研修で学び感じた点を自信を持って堂々と発言し、本場に彼らが数か月前の同じ高校生だったのか、目を見張る程の成長振りでした。



羽ばたけ未来へ！

3. 「期待を込めて」

今回の欧州訪問は、一月末の英国のEU離脱時期に加え、さらには今や世界を震撼させる新型コロナウイルス禍が欧州に影響を及ぼす直前でした。後から振り返ると、正に歴史の大きな転換点にいたのかもしれない。今回の参加者の皆さんは、今は将来の夢に向けて全力投球の日々でしょうが、この大変革期にいた事実と自身の経験を糧にして、大きく羽ばたいてもらいたいと思います。一層の成長を期待して、事務局の報告記と致します。

～経験を糧にして～

高校生の声



青森山田高等学校
さとう みれい
佐藤 海麗さん

私は今回、この研修に参加してみて原子力に対する考え方が大分変わったと思います。それに加え、日本に一番適していると思う安定したエネルギー供給ができる「エネルギーミックス」についての意見交換もでき、いろんな考え方を知ることができました。

スウェーデンの原子力関係の職場で働いている人は「今の原子力に関する問題は、次の世代まで延ばしてはいけない」という考えを持ちながら毎日働いていることに本当に感動しました。日本と違いエネルギーに対する意識の違いはそれだけでなく、海外の高校生とのディベートでもはっきりしたと思います。日本も福島事故の件を先延ばしにするのではなく、今すぐにでも解決しなければいけないと思いました。

他にも、将来に対する考え方があったり、これからの私たちはどのようにすべきなのかを、考えさせられる良い機会になったと思います。そしてこれから私は、まずは大学合格に向けて勉強に取り組み、それから留学などをし、今回身に付けることができた事を十分に活かしていきたいと思っています。



日本原燃(株)
原子燃料サイクル施設等を視察
(11月)



八戸聖ウルスラ学院高等学校
うしき りん
牛木 鈴さん

今回の研修は全体目標である「サステナブル〜ハッペンしよう!夢の切符〜」を達成するために多くのものを学べたと思います。相手に自分の考えを押し付けるのではなく、どうしたら良いのか互いに考え気づくという行動が今回の研修で身についたような気がします。

研修を通して、私はまだまだエネルギーについての知識が足りないと感じたので、研修後もインターネット等で調べて未来の発電のあり方などに自信を持って意見を述べられるようにしたいと思います。

国内研修会の様子



青森県立青森南高等学校
おがさわら まな
小笠原 愛奈さん

今回、このような貴重な体験をさせていただきエネルギーについての知識を蓄えるだけでなく、多くの方とかわっていく中で視野が広くなり内面的に大きく成長することができました。現地の高校生とも英語で積極的に交流でき、充実した時間となりました。

日本ではエネルギー教育がまだ十分ではないためエネルギーには無関心な若者が多いと思います。しかし、現地の高校生は専門的な知識に加えしっかりと持論を持っておりエネルギーに対する意識の違いを感じました。今後は自らがエネルギー問題について発信する立場となり今回学んだことをきちんと将来に活かしていきたいと思っています。



東北放射線科学センターによる
放射線講座を受講(1月)



八戸工業大学第二高等学校
ささき はるな
佐々木 陽菜さん

私たちが設定した全体目標、サステナブルに込められたあらゆる面での持続可能な発展。私は特に、現地であ会った高校生たちのコミュニティと、エネルギーの面から見た地球環境に関して、それがあると感じました。高校生たちとはSNSを通して交流を続け、今後お互いに様々なことを教え合っていきたいです。そして、私たちがエネルギーをうまく活用し、安定したバランスを保てば、より良い未来を創っていけると思っています。



五所川原第一高等学校
ちば なると
千葉 成人さん

今回、私を含め6人で様々な経験をしました。授業では習うことのできない内容や現地の高校生との交流は、貴重であり私を成長させたものでした。

エネルギーでのディスカッションでは、現地の高校生の考えに驚きを感じました。日本の学生のほとんどが持っていない知識を持っていたのです。私はもっとエネルギーについて向き合うべきだと感じました。

私は将来教師を目指しています。今回の研修で得た知識や考え方を伝えられるように日々精進し、この経験を無駄にしないようにします。



2月28日(金)
青森県庁にて柏木副知事(右奥)に研修結果を報告



青森県立五所川原工業高等学校
のみや きよむ
野宮 白夢さん

今回、スウェーデンとフランスを訪れ、放射性廃棄物貯蔵施設や再処理工場の見学、現地高校生とのディスカッション、文化交流など非常に有意義な研修となりました。

ディスカッションでは、現地高校生のエネルギーに対する関心の高さや各発電方法に対する考え方の違いに驚きました。また、文化交流では、部活動で学んでいる少林寺拳法の技を披露し、簡単な動きを教えることができました。少林寺拳法に興味をもってくれたことは、非常に嬉しかったです。

私の将来の夢は、工業高校の教師になることです。そのために、エネルギーの勉強は不可欠であることを再確認しました。

今回の研修会で学んだことをきっかけに、さらにエネルギーに関する知識を深めたいと思っています。